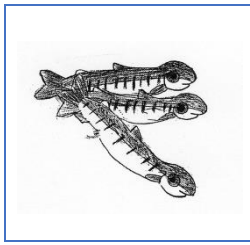


2017.8.1
Vol. 52

北海道サケネットワーク Newsletter

発　行　阿部周一
事務局　木村義一　札幌サケ協議会
〒004-0022
札幌市厚別区厚別南 7 丁目 18-19
Tel/Fax：011-894-0081
e-Mail：giichiketa@yahoo.co.jp
URL：http://salmon-network.org/

総会挨拶：阿部周一代表（右）
進行：木村義一事務局長（左）

2017 年度総会終わる

新たな会計年度に基づいた北海道サケネットワークの総会が、5 月 27 日（土）13 時～14 時、札幌エルプラザ 2 F 環境研修室にて開かれた。

阿部周一代表の挨拶に続いて、木村義一事務局長を進行役に議事に入り、報告事項・協議事項について審議した後、情報交換が行われた。

報告事項では、2016 年の活動として①前回総会・サケ会議の報告　②会報 9 号の発行　③ニュースレター50 号・51 号の発行が報告された。

規約の一部を改正

協議事項では、

①2016 年度（16.1.1～16.12.31）収支決算報告及び会計監査報告が別紙により報告され、承認された。

②2016 年度後期（17.1.1～17.3.31）収支決算報告及び会計監査報告が別紙により報告され、承認された。

③ 2017 年度活動計画及び予算案（2017.4.1～2018.3.31）が別紙により提案され、承認された

④会計年度の改正（「4 月 1 日から翌年 3 月 31 日まで」に変更）及び規約改正が別紙により提案された。

なお、条文中に「臨時総会を開催することができる」の項目を追加することが役員会の決定事項として提案があった。

「付則」に次の文言を加筆することが提案された。「付則　この会則は 2016 年 11 月 12 日から施行する」

以上についてそれぞれ承認された。

⑤役員改選（任期 2 年で、2017 年度は 2 年目）について別紙により提案され、承認された。

⑥その他

●会員名簿に「長万部漁業協同組合」が記載されているが、音信不通や会費未納が長期にわたり続いていることから、事務局としては名簿から削除したい旨の提案があり、承認された。

●SWSP に対し北海道サケネットワークに加盟してもらうようにすべきだとの提案があり、阿部代表からその方向で調整する旨の回答があった。なお、出席した札幌市豊平川さけ科学館の佐藤氏から SWSP の概要の説明があった。

9 団体から活動現況報告

情報交換では、

次の出席団体の代表者から、各団体の活動現況報告があった。

①水産研究・教育機構北海道区水産研究所　②千歳水族館　③標津サーモン科学館　④北海道大学理学院 浦野名誉教授　⑤北海道立総合研究機構 河村氏　⑥とかち帯広サケの会　⑦大雪と石狩の自然を守る会　⑧丸水札幌中央水産(株)　⑨札幌サケ協議会

2017 年度サケ会議

引き続いて同じ会場で 14：00～17：00 まで、札幌サケ協議会と北海道サケネットワークが主催する 2017 年度サケ会議が開かれた。

近年、ふ化事業により維持されてきた我が国のサケマス資源は減少の傾向にある。サケマスは北海道や東北など北日本の主要漁業資源であることから、その漁獲の低迷は地域経済に大きな影響を与えている。

資源減少の原因としてふ化事業の問題や地球温暖化による気候変動と海洋環境の変化などが挙げられているが、まだ不明な点が多い。

サケマス資源の展望をテーマに

こうした状況の中、サケマス資源に関する現状を知り今後の展望を得るため、沖合サケマス資源の現状、並びにサケマス漁業や養殖の課題などについての知見を得ることを趣旨にテーマが設定された。

北海道サケネットワークの阿部周一代表の挨拶に続いて、河村博顧問の司会によって次の 4 本の講演がなされた。

● 「北太平洋のサケマス資源」
斎藤寿彦 氏（水産研究・教育機構北海道区水産研究所さけます資源研究部）

● 「沿岸環境とサケマス回帰」
春日井潔 氏（北海道立総合研究機構水産研究本部さけます・内水面水産試験場さけます資源部）

● 「サケマス漁業の課題と展望」
宮腰靖之 氏（北海道立総合研究機構水産研究本部さけます・内水面水産試験場さけます資源部）

● 「魚類養殖における育種の役割」
山羽悦郎 氏（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター七飯淡水実験所）

サケ情報

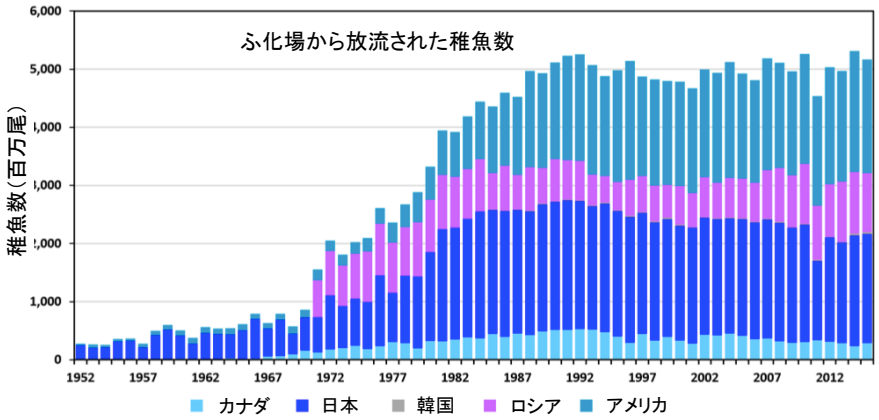
サケの回帰と旅立ち

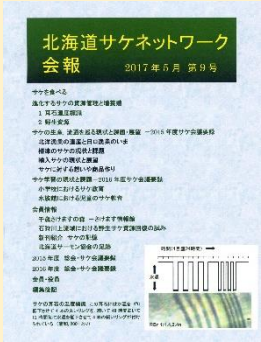
北海道におけるサケの来遊数（沿岸の漁獲数と河川の捕獲数の合計）が近年減り続けていることは、前号でもお知らせしたとおりです。このうち漁獲数をみると、昨年は一昨年より 30%も少ない約 2400 万尾でした。しかし、漁獲数が少なかったため魚の値段が高くなり、漁獲金額は約 500 億円と一昨年に比べて 10%程の低下にとどまっています。では、今年のサケの来遊数はどうなるのでしょうか。北海道のさけます・内水面水産試験場が毎年この時期に発表する予測では、昨年をさらに 3.8%下回る来遊数になりそうです。予測どおりになれば、近年でも特に低い水準が 2 年連続することになります。減少の理由は明らかになっていませんが、どうやら稚魚が川から海に降りた時の海水温が 2 年続けて低く、稚魚の生き残りが悪かったことが一因のようです。

日本のサケ漁は沿岸で行う定置網漁の他に、入漁料を払ってロシアの 200 カイリ内で行う漁業があります。一昨年までは魚を流し網で獲っていましたが、この漁法が禁止されたため、昨年からは引き網による漁業に代わりました。引き網は流し網に比べて規模が小さいせいか、昨年は割り当て量の 62 トンに対して漁獲は約 13 トンにとどまっています。このように、昨季のサケ漁は沿岸でも沖合でも厳しい状況が続きました。

そのようななか、今年も人工ふ化されたサケ稚魚の放流が終了しました。人工ふ化放流はサケの資源量を維持するための有効な手段であり、北日本各地から毎年約 18 億尾の魚が放されています。そのうち、北海道区水産研究所は約 1.3 億尾の放流を計画し、予定どおりに進めることができました。今年の稚魚が海に降りた時の海水温がどうだったのか、調査結果が気になるところですが、低迷する来遊数を少しでも改善できるよう、稚魚の生き残りに期待したいところです。ところで、世界の人工ふ化放流はどの程度の規模で行われているのでしょうか。国際機関がまとめた日本、カナダ、アメリカ、ロシア、韓国から放流された稚魚数の推移を下図で紹介します。資料は北太平洋遡河性魚類委員会（NPAFC）のホームページから拝借しました。1980 年台後半以降、毎年ほぼ同数が放流されておりますが、そのうち日本とアメリカの合計が約 75%を占めています。

（伴　真俊）





会報第９号発行！

北海道サケネットワーク会報
第９号（2017 年 5 月 25 日）
編集・発行　浦野明央
A４判・40 頁

●内容…１）サケを食べる２）進化するサケ資源管理と増養殖 3）サケの生産、流通を巡る現状と課題・展望 4）サケ学習の現状と課題 5）会員情報 6）2015 年度総会・サケ会議要録 7）2016 年度総会・サケ会議要録 8）会員・役員 9）編集後記

本会のホームページ参照
URL：http://salmon-network.org/public_html//

Topics

「海の栄養、森へ還る —サケと河畔林の関係—」

長坂晶子さん

あさひかわサケの会と大雪と石狩の自然を守る会が主催する 2017 学習講演会「学ぼう川のはたらき」が、7 月 23 日（日曜）旭川市神楽公民館講座室で開かれました。

北海道立総合研究機構林業試験場研究主幹の長坂晶子さんが、自ら関わった調査結果を基に、標記の演題について 1 時間 30 分に亘って講演。

河川における河畔林の役割、サケ・マスの遡上が陸域の生態系に及ぼす影響、北海道のサケ遡上河川における実態などが、クイズも交えるなどして、実に分かりやすく話されました。

情報をお寄せ下さい！

会員の皆さんの動き・サケに関する情報・イベント等がありましたらぜひ編集担当（寺島）までご一報下さい。

E-mail：tera2112@potato.ne.jp